

熊本・鹿児島 中学生自殺

初動調査に不信感

遠い真相

学校事件事故

②

今年4月、熊本市立中に入学直後の男子生徒(当時13歳)が学校から帰宅後、自宅マンションから飛び降りて命を落とした。

その1カ月前の小学6年だった3月、生徒の母(45)を含む保護者グループが「体罰や暴言を繰り返した」として当時の担任だった男性教諭の処分を市教委に要請していた。かねて厳しい指導が問題となっていた。

生徒は同級生が体罰や暴言を受けていたことに心を痛め「先生がうざい」と母に漏らしていた。3月には別の教諭が学校で生徒のノートに「死」と書いてあるのを見つけた。教諭が書いた理由を尋ねると「ストレス解消」と生徒が軽い様子で答えたため、校長らは親に伝えていなかったという。

市教委は7月、担任の指導についての調査結果を中間報告した。子供を注意するため胸ぐらをつかんだ▽子供に「アホ」「役に立たない」と発言した▽教諭の指導で複数の子が登校を渋

ったり、休みがちになったりした――など27項目を認めた。市教委は毎日新聞の取材に「生徒は被害者に含まれていない」と答えた。

生徒の母は5月10日に市教委と面会した際「担任の不適切な指導が息子に影響したのではないか」と訴えていた。しかし、その3日後に市教委は遺族への説明なしに自殺の調査報告書を文科科学省に提出していた。遺族はその後の情報公開請求でこの事実を知った。

文科省の指針では、児童生徒の自殺直後に学校や教育委員会は遺族に配慮しながら指導記録や子供のノートを確認するなどの基本調査をするよう求めている。しかし、情報公開で入手した市教委の報告書には、担任の指導についての記載はなく「小学校からはいじめ事案などの報告はなし」とだけあった。

両親は7月、自殺と担任の指導との関連を調査するよう市教委に文書で求めたが、まだ結果は出ていない。親子で外出した時、食事を母に半分分けてくれるような優しい子だった。「担任の不適切な指導を把握しながら、関連を調べもしない市教委はあまりに不誠実

遺族「不適切指導」疑い

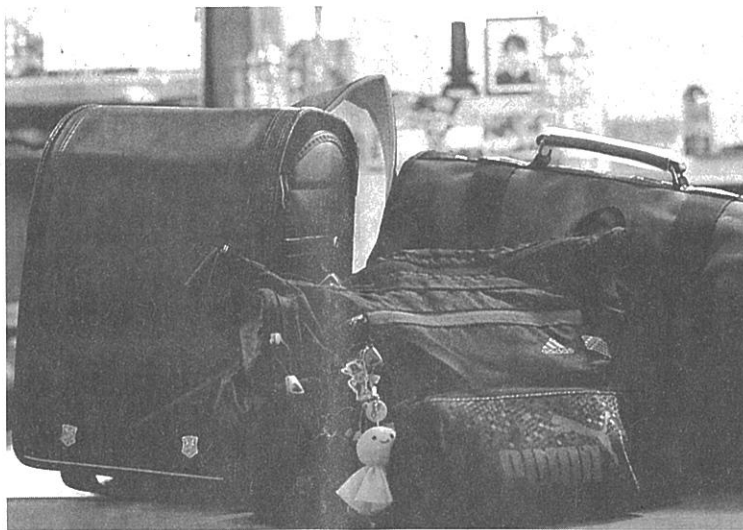
だ」と母は憤る。

学校などによる初動の調査に不信感を募らせる遺族は多い。いじめや教師の不適切な指導による自殺などの遺族らを対象に毎日新聞などが実施したアンケートでは、第三者委が設置される前の学校などの基本調査に、62人のうち45人が「納得できない」と回答した。

鹿児島市では昨年9月、市立中3年の男子生徒(当時15歳)が、夏休みの宿題を忘れたとして職員室で担任の女性教諭から指導を受けた後、自宅で命を絶った。母(46)によると、生徒が指導を受けていた時、複数の

別の生徒が担任の怒鳴り声を聞いていた。

しかし、学校が開示した報告書には「怒鳴るような指導ではなかった」など別の教職員から聞き取った内容が記されていた。今年1月、市教委が設置した第三者委の調査が始まったが、母は「委員選任などで遺族の要望は通らなかった」と訴え、学校の調査から生まれた不信感は続いている。魚釣りが好きで友人や母らとよく海に出かけ、水産高への進学を目指していた。「何があったのか本当に解明されるのか」。母は悩み続けている。 || つづく



中学入学直後に亡くなった男子生徒(中央奥に遺影)のランドセルやかばん。今も遺族は大切に保管している
＝熊本市で1日、樋口岳大撮影